神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

ドゥルーズ哲学の地図

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2001-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 敏彦, Tanaka, Toshihiko メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/959

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

ドゥルーズ哲学の地図

田中敏彦

1　方法・理論（概念）・体系

彗星のように自ら去って行ったドゥルーズの後に隕石の如き作品群が残された。フーコーはドゥルーズの思想がその全貌を現した時点、すなわち『差異と反復』（一九六八）と『意味の論理学』（一九六九）が出版された時点で次のように述べた――《常に遊牧的で常にアナーキーな差異から、常に過剰で常に移動する回帰の徴（しるし）へと、ドゥルーズの名を持つ稲妻が走った。新しい思考が可能になった。思考が再び可能になった。それは遠い将来によって約束された未来の思考ではない。それはドゥルーズの文章のなかにある。私たちの前ではね回り私たちの間で踊っている。(Foucault [1994 : 98])》ドゥルーズの生動する思考をいつか描いてみたいと思う。ドゥルーズは、「真理」や「善」や「存在の意味」の探求などという様々な仮面を被ってきた哲学の本性を、すなわちその創造的性格を露呈させた哲学者である。しかしそれだけに、彼の思考の強度にみあうような文章で、その奔放な創造性と、にもかかわらず微細を極め

る論理とをうまく分析することは至難の業だ。しかし我々が今試みようとするのはそれではない。隕石のごとく我々の前に置かれたドゥルーズ哲学を「方法」・「理論」そして「体系性」の観点から検討することである。これはドゥルーズがベルクソンやニーチェやカントやフーコーについて実行したことをドゥルーズについて遂行するということである。

例えばドゥルーズのベルクソン論（一九六六）は、ベルクソンの「直観」をもっとも精巧な哲学的方法として解明するところから始まって、「持続」・「記憶」・「生の飛躍」というベルクソンの主要理論を順次辿ることによってベルクソン哲学の体系を凝縮して提示している。カント論（一九六三）についても「超越論的方法」を論じた後で能力理論の観点から三批判全体の体系性を描いている。そしてニーチェ論（一九六二）は、ニーチェの方法を「演劇化の方法」と規定し、「力能の意志」・「超人」・「永劫回帰」などの理論を解明しつつ、もっとも非体系的と見なされているニーチェ哲学の体系性を構成してみせたのである。体系性はヘーゲルやカントの専売ではなく、それぞれの哲学が孕む、理論相互の、あるいはドゥルーズ的意味での「概念（コンセプト）」相互の独自な関係性の別名である。こうした関係性ないし連結性をもたない哲学はありえない。ドゥルーズはジャン＝クレ・マルタンのドゥルーズ論の序文で体系について次のように述べている――《私は体系としての哲学を信じています。私が嫌いなのは同一性や相似性や類比性に関係づけられた体系の観念なのです。最初に哲学と体系を同じものと見なしたのはライプニッツだと思いますが、ライプニッツが言う意味での体系としての哲学という考えには賛成なのです。だから「哲学を越える」とか「哲学の死」といった問いに心を動かされたことは一度もありません。私は自分を非常に古典的な哲学者であると感じています。私にとって、体系とは永続的な異質状態（en perpétuelle hétérogénéité）になければならないだけでなく、異質発生（hétérogenèse）でなければならないのです。これは未だかつて試みられたことがないことのように思われます。（Martin［1993：7］

／マルタン［一九九七・七］）（翻訳では hétéro-genèse が「突然変異」と訳されているが言うまでもなくこれは誤訳である）。》

ドゥルーズの方法と幾つかの理論については私自身すでに何度か論じてきた。混交した現象を質的差異の線を発見して異質な要素に分析し、しかる後に差異の度合の観点から異質な要素の相互作用を考察するドゥルーズの「方法」については、拙稿「戦争機械と国家装置――ドゥルーズの方法について」（『GS・第四号』・一九八六）で分析し、ドゥルーズの「能力理論」については拙稿「カントとドゥルーズ――能力論を中心にして」（『現代思想』臨時増刊ドゥルーズ＝ガタリ特集・一九八四）で、「問題の理論」については拙稿「ドゥルーズ哲学序説――問題論をめぐって」『ドゥルーズ横断』・一九九五）、「他者の理論」については拙稿「様々な他者――ドゥルーズの他者論をめぐって」（『神戸外大論叢』・第五〇巻第4号所収・一九九九）において、「個体の理論」については拙稿「個体論（Ⅱ）――ドゥルーズの個体過程観について」（『神戸外大論叢』・第五一巻第5号所収・二〇〇〇）において、それぞれ検討した。

ドゥルーズ哲学の体系性についても、それを「概念の地図」として、簡単に言えば一種の見取り図として提示する試みを、拙論「ドゥルーズと哲学史」（『西洋哲学史の再構築に向けて』所収・二〇〇〇）ですでに行っているのであるが（図表1）、しかしなぜ「地図」なのかはこれまで十分に論じないままであった。本稿ではそれを論じてみたい。ここで「ドゥルーズ哲学の地図（図表1）」の説明を述べておこう（下線は本稿で言及するものを示す）。時期的には前・中・後期を区別して三つの層に対応させ、それぞれ二つないし三つの領域に区別した。『差異と反復』と『意味の論理学』は、すでに言ったように、ヒューム論（一九五三）から始まって、ニーチェ論・カント論・プルースト論（一九六四）・ベルクソン論・マゾッホ論（一九六七）・スピノザ論（一九六九）などの哲学史的または文学批評的著作を通して生成したドゥルーズ哲学の全貌を示すものである。ほぼ六〇年代をおおうこの時期をドゥルーズ哲学の前期と仮に呼ぶとす

図表1

	Chaos 混沌	Chaoïdes 混沌様体＝★Chaosmos 混沌的秩序	Cosmos 秩序	Urdoxa	Opinion 意見【臆説】
後期 『哲学とは何か』（一九九一）		★内在面と概念と概念的人物（哲学） ★参照面と関数と部分的観察者（科学） ★組成面と感覚と感性的形象（芸術）			
中期 『千のプラトー』（一九八〇） 『アンチ・オイディプス』（一九七二）		★内在面あるいは共在面 ★リゾーム（地図） 生成（女性―子供―動物―分子……） 脱領地化（脱地層化） 抽象機械 ★戦争機械（平滑空間） 器官なき身体――欲望機械 1 生産の接続的綜合 2 登録の離接的綜合　内在的使用 3 消費の連接的綜合	作業配置アレンジメント (再)領地化（地層化） 顔面性機械 ☆国家装置（条理空間） 社会機械（領地機械・専制君主機械・資本主義機械） 超越的使用	☆超越面あるいは組織面 ☆樹木（転写）	
前期 『意味の論理学』（一九六九） 『差異と反復』（一九六八）		★存在の一義性 ★幻象界（無意識的・超越論的領野）（遊牧的分配・理想的遊戯） ★逆説（逆説）・像なき思考 ★意味＝出来事 静態的発生（存在論的・論理的） 動態的発生（深層・高層・表層） 1 深層　雑音 2 高層　声 3 表層（物体的表層から形而上的表層へ・言葉から動詞へ） ★差異の概念（理念の弁証法と強度の感性論＝美学） 微分（理念＝問題＝潜勢的多様体） ↓ 個体化（内包的個体化領野） ↓ 演劇化（時空の力動系） ↓ ★エレホン ★反復の概念 三受動綜合 （1 結合　2 内的共鳴　3 強制運動） 1 生ける現在 ／ 習慣 ／ エス ／ 基盤 2 純粋過去 ／ 記憶 ／ エロス ／ 基礎 3 時間形式・未来／永劫回帰／タナトス／脱根拠	☆存在の類比性（定住的分配・通常の遊戯） ☆表象界（意識的・経験的領野） ☆臆説（常識と良識）・正統的思考像 ☆命題の三次元（表出・指示・意義） ☆概念的差異　表象の四つの首枷 個体 主体 ☆カテゴリー ☆概念なき反復 同一性 対立性 類似性 類比性		

れば、ガタリとの共著で「資本主義と分裂症」の総題をもつ二部作『アンチ・オイディプス』（一九七二）と『千のプラトー』（一九八二）は七〇年代の中期を集約する仕事である。八〇年代の後期は、ドゥルーズ単独の仕事として、『フランシス・ベーコン――感覚の論理学』（一九八一）と『映画』（全二巻 一九八三／一九八五）で芸術論が展開される一方で、二冊の思想家論『フーコー』（一九八六）と『襞――ライプニッツとバロック』（一九八八）が発表された。そしてガタリの急逝（一九九二）によって最後の共著となった『哲学とは何か?』（一九九二）が公刊された。

ドゥルーズ（とガタリ）の主要な著作だけを取り上げて、スピノザ論やライプニッツ論、あるいは映画論や文学論などを考慮にいれていないのは、まずは出来るだけ簡単な地図を作成するところから始めるためにすぎない。ドゥルーズ哲学の微細な生成変化（概念の創造と反復）を辿ることは、その地図をさらに緻密にしていくことである。たとえば、地図上のある領域（図表1の「微分（理念＝問題＝潜勢的多様体）→個体化（内包的個体化領野）→演劇化（時空の力

図表2

他者なき世界（他者とは他なるもの）		他者のいる世界
潜勢状態 Virtuel 微分化 Différentiation	現勢化 Actualisation 分化 Différenciation	現勢状態 Actuel
理念の弁証法	強度（内包量）の感性論＝美学／幻象界	表象界
前個体的諸特異性	個体化の諸要因 個体化領野	「他者」〔自己／（他者）〕 反折 Réplication
過折 Perplication	内折 Implication	外折 Explication

動系）→分化→個体・主体」と表記された部分）は、拙稿「個体論（Ⅱ）――ドゥルーズの個体過程観について」が探索した領域であるが、拙稿「様々な他者――ドゥルーズの他者論をめぐって」は「他者の理論」の観点から同じ領域を探査してより詳しい地図を作成したのである（図表2参照）。

2　概念の地図としての体系

α　思考は歴史よりも前に地理を体系よりも前に空間的諸次元を持つ

この地図作成の試みは次のようなドゥルーズの一連の発言を踏まえて構想された。まず第一に『意味の論理学』から――《「思考において方向をいかに定めるか」が問われる時、明らかな事は、思考それ自体が様々な軸や方向を持ち、それらに従って思考は展開するということ、思考は歴史を持つ前に地理を持つのであり、様々な体系を構成する前に様々な【空間的】諸次元を定めるということである。(Deleuze［1969：152］)》。つまり体系性の地図を描くことは体系性そのものがそこで成立する空間を規定することを含んでいる。より具体的に言えば、『意味の論理学』の《【空間的】諸次元》とは深層・高層・表層という位相的な区別を意味しているのであり、この位相的構図が哲学の類型に適用されると、深層の住人である前ソクラテス派の哲学者たち、イデアの高層に住まうプラトン主義者たち、そして表層を発見したストア派の哲学者たち、の三類型の区別として現れる。また、精神分析的知見に適用されて、深層の精神分裂症、高層の躁鬱病、そして表層の倒錯、という精神疾患の三類型として現れる。この時期（前期）のドゥルーズの立場は、ストア派の哲学者たちが発見した表層に位置するものであり、かつ倒錯に親近性をもつものであった。すなわち、この段階の

ドゥルーズは、精神分裂症を深層に位置づけ、意味＝出来事が成立する以前として否定的に把握しているのであり、むしろ表層に位置づけられた倒錯に活路を見いだしていたのである。

中期の『アンチ・オイディプス』においてドゥルーズ哲学とフロイト＝ラカン精神分析との妥協の余地のない対立が顕在化する。表象的無意識と生産的無意識、舞台としての無意識と工場としての無意識というように、両者の対立の構図は明確であるが、ドゥルーズ哲学の体系的理解を目指す上で最も困難なのは前期から中期への飛躍をいかに把握するかということである。『アンチ・オイディプス』の「資本主義と精神分裂」という総題が示すように、ここではドゥルーズ（そしてガタリ）は活路を病ではなく過程としての精神分裂に見出しているのであり、倒錯はもはや精神分裂的過程がある段階（図表1の社会機械＝領地機械）で固着した結果にすぎないとされる。なによりも高層・表層・深層という区別が否定され、すべてはかつて深層に位置づけられていた「器官なき身体」の表面上で生起するかのようである。さらに言えば、前期においてドゥルーズ哲学のなかで精神分析の占める微妙な位置が、中期における明確な対立的位置へと位相的に激変するということである。この位相的変化を測定することは極めて難しい。まずそのためには前期ドゥルーズ哲学において精神分析の位置が規定されなければならない。それは、明確な対立ではなく、かといって全面的な同一でもない、差異と同一性の混交からなる微妙な位置なのだが、ここでは課題の指摘にとどめておく。

β 経験的世界の秘境としての超越論的領域を探検する

第二に、「思考において方向をいかに定めるか」（一七八六）を書いたカントについて、ドゥルーズは『差異と反復』において次のように述べている――《すべての哲学者のなかで超越論という驚異的な領域を発見したのはカントである。

彼はいわば偉大な探検家である、他界ではなくこの世界の山または地下の探検家である。(Deleuze [1968 : 176])》経験的世界の秘境としての超越論的領域という思想はドゥルーズがカントから学んだもっとも重要な観念である。

ここで『純粋理性批判』の一節(第二部超越論的論理学・第二編原則の分析論・第三章「あらゆる対象一般を現象体と本体に区別する根拠について」の冒頭)を引用してみよう。注目すべきは、真理が保証された純粋悟性の領域と仮象の支配する純粋理性の領域の区別が、大洋に囲まれた島と濃霧と氷に覆われた大洋という地理的比喩で語られていることである。《我々はいま純粋悟性の土地をくまなく歩き回って、この土地のそれぞれの地方を注意深く観察してきたばかりでなく、この土地を測定し、そこにあるそれぞれのものに場所を定めたところである。しかしこの土地は一つの島であって、自然によって不変の境界のなかに閉じこめられている。これは真理の土地(魅惑的な名前だ)であり、嵐にもまれる広大な大洋に囲まれているが、この大洋は紛れもなく仮象の本拠地であって、そこには多くの濃霧とすぐに溶ける多くの氷があって、偽って新しい陸地であるかのように見えるために、発見を夢見て冒険の旅に出た航海者は、絶えず空しい希望によってそこに引き寄せられるのである。彼はこの冒険を放棄することも成就することも決してできない。しかし我々はこの海に乗り出してすべての地域を探索してそこに何か希望すべきものがあるのかどうか確かめる前に、我々がいま立ち去ろうとしているこの土地の地図を一瞥し、次のように問うてみることは有益であろう。第一に、もし我々の定住しうるようないかなる領土もこの土地以外には存在しないとしたら、我々はこの土地に含まれているものだけでとにかく満足しうるのか、それとも必要に迫られて満足しなければならないのかどうか。第二に、我々はいかなる資格でこの土地を所有し、あらゆる敵対的な要求に抗して我々の安全を確保するか、ということである。(Kant [1952 : 287])》

カントのこのような地理的な発想は、ドゥルーズ哲学の重要な要素であり、我々の地図作成の試みにとってもきわめて示唆的だ。たとえカントが超越論的領域を経験的領域から単に「転写」しているに過ぎないと批判してドゥルーズ自身が真の超越論的領域の探検に乗り出していくにしても、したがってドゥルーズ哲学の探検した超越論的領野は、むしろカントが警告した「仮象の本拠地」としての「多くの濃霧とすぐに溶ける氷」がある「大洋」の側にあるとしても。

我々の作成したドゥルーズ哲学の地図（図表1）では、「存在の一義性（遊牧的分配・理想的遊戯）」に対して「存在の類比性（定住的分配・通常の遊戯）」、「幻象界（無意識的・超越論的領野）」に対して「表象界（意識的・経験的領野）」を区別している。常識と良識の支配する経験的領野と、それを取り巻く大洋のような超越論的領域を区別しているのである。地理的に言えば（地図作成の立場から言えば）、このような二つの領域の対比の構図がドゥルーズ哲学の特徴である。それはまた哲学史的に見れば（拙稿「ドゥルーズと哲学史」ですでに論じたように）、ドゥルーズ哲学は、西欧哲学の主流（存在の類比性＝定住的分配＝条理空間）ではなく、傍系の哲学の系譜（存在の一義性＝遊牧的分配＝平滑空間）に属することを示している。

γ 地下茎は地図であって転写ではない

第三に、『千のプラトー』は、樹木（ツリー）と地下茎（リゾーム）の対比を転写と地図の対比として述べている――《樹木の論理全体が転写と複製の論理である。（……）それは超コード化する【深層】構造ないし逆に下から支える発生的軸から出発して、既成のものとして与えられている何かを転写するものだ。（……）地下茎は全く別だ、地図であって転写ではない。（……）地図は様々な領野を連結し、様々な器官なき身体の閉塞を打開してそれらを共在平面の上に

最大限開くことに協力する。地図自身が地下茎に属しているのだ。(Deleuze & guattari [1980 : 20])》樹木と地下茎の対比はドゥルーズ哲学の基本構図に位置づけられる(図表1参照)。ここで「地図」に対比されている「転写」は、ドゥルーズがカントの超越論的方法を批判する時に必ず持ち出すキイコンセプトである。可能性の条件としての超越論的領野を経験的領野から単に「転写」すれば、どうなるか。それは経験的領野を正当化し、現実の追認に終わるだけである。逆に言えば、経験的領野から超越論的領野へはすんなりと連続的に移行することはできない。経験的領野の枠(前期のドゥルーズはそれを常識と良識という形で考察していた)から何らかの仕方で逸脱しない限り、新しい創造の条件としての超越論的領野に辿り着くことは出来ない。ベルクソンが言うように、《経験をその源泉にまで探しに行くこと、あるいはむしろ、我々人間にとっての実用性の方向に屈曲して経験がまさに人間の経験になる、決定的な転回点の上に経験を探しに行くこと(Bergson [1959 : 321/205](傍点は原文イタリック))》ことが必要なのだ。そしてドゥルーズが自らの方法を「超越論的経験論」と称したのは、超越論的領野は「我々人間にとっての実用性の方向に屈曲して経験がまさに人間の経験になる、決定的な転換点の上」で探索されるべきものであるからである。

δ 概念の創造は内在面の一領域を構成することである

第四に、『哲学とは何か?』を予告する一九八八年の対談におけるドゥルーズの発言は「地図作成」を目指す我々にとってきわめて重要である――《概念を創造すること、それは内在面の一つの領域を構成することであり、新しい領域を探検して先行する諸領域に一つの領域を附加することであり、空白部分を埋めることです。概念とは様々な線、様々な曲線の合成されたもの、緊密に組み合わされたものです。概念が絶えず更新されなければならないのは、まさしく内

在面は領域によって構成されるからであり、局所的に次から次へと構成されるからなのです。（……）しかしこのことは概念が再び取り上げられて体系化されることはないということを意味しないのです。そうではなく逆に、概念には反復の力能があり、それによって一つの領域と他の一つの領域が接合されるのです。そしてこの接合は不可欠で絶え間ない操作であって、世界をパッチワークとして構成するのです。（Deleuze［1990：201］）》新しい領域を探検して新しい概念を次々に創造することと、概念が反復されることによって領域同志が接合されもすること、この二つの側面に注意しておこう。ドゥルーズ哲学の地図とはドゥルーズが創造した様々な概念の地図であるとともに、概念の反復をしるす**地図**でもある。

ここでドゥルーズは《概念とは様々な線、様々な曲線の合成されたもの、緊密に組み合わされたものです。》とだけ述べているが、ドゥルーズの言う「概念」は、それ自体ドゥルーズが創造した独特の「概念」であって、次のような特徴を持つ。まず第一に、概念は、相互に区別される異質な諸成分を、それらを相互に識別できないような近傍帯によって、分かち難く結びつけられた（内的共在性 endo-consistance）多様体であるということ。たとえば《他者は、可能世界であって、その可能世界はそれを表現する顔に現実存在し、それに現実性を与える言語に現実化する。この意味で、他者は、切り離すことのできない三つの成分【可能世界・顔・言語】からなる概念である。（Deleuze［1991：23］）》。さらに第二に、「概念」は、他の諸概念と歴史的関係を持つとともに、共存する他の諸概念と現在的連結すなわち変成の関係を持つということ。変成の関係とは、概念は必ず有限数の成分をもつが、これらの成分自身が概念になりうることから、概念は次々と架橋によって連結されていくという事態（外的共在性 exo-consistance）をさす。たとえば「他者」概念の成分である「顔」は『千のプラトー』において人間の身体を「超コード化【上位規範化】」する「顔面機械」

として概念化される。このように、概念は「内的共在性」によって互いに異質な諸成分を連結すると同時に、「外的共在性」によって他の諸概念と連結していくのであり、ドゥルーズの哲学の「体系性」を構成するのは、この内的かつ外的な共在性にほかならない。

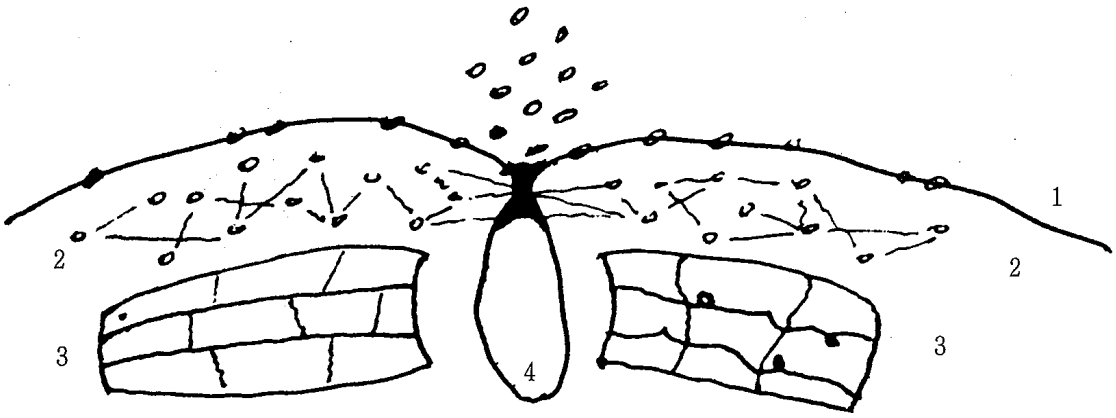
ところで問題は、ドゥルーズ哲学の全体を一枚の地図に描き得るかどうか、ということである。前期に属する『意味の論理学』の言う、体系を構成する以前に定められる「【空間的】諸次元」と、中期の『千のプラトー』の「共在面」、後期に属する「内在面」、これらは同じなのか、異なるのか、ということである。とりわけ、すでに述べたように、前期ドゥルーズ哲学から中期ドゥルーズ（とガタリ）哲学への飛躍とも見える激変においてどこがどう変化したのかという問題がドゥルーズ哲学の研究においてもっとも困難なしかしもっとも興味深い課題である。そして中期において「アンチ・オイディプス』から『千のプラトー』への変化も決して小さくはない。さらに哲学を科学と芸術から区別するために「参照面」や「組成面」を導入した『哲学とは何か』は、すべてが唯一の「内在面」の上で思考されていた中期とは異なる風景を描いている。こうした問題に答えるためには、まずそれぞれの地図が作成されなければならない（図表1が前期・中期・後期の三つの層を区別したのはそのためである）。

3　暫定的結論

ドゥルーズの死後出版された彼に関する研究書は仏語・独語・英語・日本語を含めて数十冊にのぼるであろう。しかしドゥルーズ哲学の全体を見通したものは管見の限り存在しない。前期のドゥルーズ哲学だけを対象にした研究が、そ

れが伝統的な哲学の枠組に比較的おさまりやすいために、もちろん多いのだが、前期ドゥルーズ哲学の三部作である『差異と反復』・『意味の論理学』・『スピノザと表現の問題』（一九六九）を視野に入れて前期の体系性を明らかにした研究さえほとんどない。ましてや前期から中期への体系的変動を論じたものはいまだ皆無であろうと思われる。だからこそここで論じてきたようなドゥルーズ哲学の体系全体を解明する「ドゥルーズ哲学の地図」が必要なのである。

本稿を閉じるに当たって、ドゥルーズがいわば「フーコー哲学の地図」を作成していることを述べておきたい。図表3（ドゥルーズ［1987：192］）を見られたい。ドゥルーズはフーコーのダイアグラムと呼んでいるが、ここでダイアグラムは「地図」とほとんど同義である。ドゥルーズによれば、フーコー（一九二六―一九八四）の仕事は、『狂気の歴史』（一九六〇）と『臨床医学の誕生』（一九六三）から『言葉と物』（一九六六）を経て『知の考古学』（一九六九）に至る前期（「知の考古学」の時期）、『監視と処罰』（一九六五）と『性の歴史』第一巻である『知への意志』（一九七六）が構成する中期（「権力」の「微視的物理学」の時期）、そして遺作となった『性の歴史』の第二巻『快楽の用法』（一九八四）と第三巻『自己への配慮』（一九八四）が形成する後期（「自己」の「系譜学」の時期）に区別することが出来る。すなわち、「知」と「権力」と「自



1．外の線　2．戦略的地域　3．地層　4．（主体化の帯域）

図表3　フーコーのダイアグラム

己」がフーコーの哲学の三つの時期に対応するテーマであるとともに、フーコー哲学を構成する三つの座標軸でもある。

地層3は「知」の地層であって、可視的なものと言表可能なものという互いに異質な二つの形態に分裂している（ちょうどカントの感性と悟性のように）。戦略的帯域2は毛細血管のようにミクロな力関係が織りなす「権力」の領域であり、「知」の地層が土のエレメントであるなら、この戦略的権力領域は海洋的大気的帯域である。外の線1は、力関係の帯域そのものをかき乱し変動させる嵐の領域であるが、いわばその外の線を折り曲げて作られた内部が、襞（主体化の帯域）4であり、フーコーが最後に探求した「自己」の領域である。フーコーの哲学の全体が凝縮された見事な地図である。

引用文献　引用は（著者名〔発行年：頁数〕）と表記する。

Bergson, Henri　1959 Oeuvres (P.U.F)

Deleuze, Gilles　1968 Différence et Répétition (P.U.F)

1969 Logique du sens (Minuit)

1986 Foucault (Minuit)

ドゥルーズ　宇野邦一訳　1987 フーコー（河出書房新社）

1990 Pourparlers (Minuit)

Deleuze & Guattari　1972 L'Anti-oedipe (Minuit)

1980 Mille Plateaux (Minuit)

Foucault, Michel　1994 Dits et Ecrits II (Gallimard)

Kant, Immanuel　1952 Kritik der reinen Vernunft (Felix Meiner)

Martin, Jean-clet　1993　Variations (Payot & Rivages)
ジャン＝クレ・マルタン
毬藻・黒川・加藤訳　1997　ドゥルーズ／変奏（松籟社）